

教育的良心に励まされる

—校長のアンケートの意見を読む—

小林 朗

この文章は一市民が校長のアンケートの意見を読み心に描いた校長に宛てた手紙の形式にしました。学校の外から学校を客観的にみてみようと思っただけです。

拝啓 校長先生お元気ですか？

2月と3月の天候が逆転して、県内でもインフルエンザが流行しています。年度末年度初めの忙しい時期に、お元気でいらつしゃいますか？

現在ほど学校をとりまく状況が厳しいことはありません。この逆風の中で、A校長先生からいただいたお

手紙を拝読して、私が想像した以上に学校は大変だということがよくわかりました。学校の責任者として、休まる日がないことがお手紙から推察できます。

校長先生が自分の意見を表明すること自体、本当に勇気のいることでしょう。よくぞお手紙をしたためてくださいました。ありがとうございます。

第一に、教員を増加してほしいことが私に伝わって来ました。教育「改革」が上から押し寄せて来ますが、校長先生や学校現場の声を反映したものはいっさい行われていないのが現実です。「ゆとり教育」が進められていたのに、今度は「学力向上」だけが声高に言われています。コロナ変わる教育政策にうんざりなさっていらつしゃることがわかりました。先生はご

自身の学校の最大の課題として、「教員の不足」をあげられています。「改革」以上に、学校に人を増やさなければ、何もできないということですね。総合的な学習、少人数学習、選択教科など新たに始まった教育課程でも教員は増えませんでした。

先生だけでなく、どの学校の校長先生も教育行政には声をあげることができないのでしょうか。本心は教員を多くしてほしいんだとよくわかりました。学校が助かる教育改革を打ち出すことが大切だと私は思いません。

第二は、A校長先生が教員の健康を心配されている事態には驚きました。心の病になる教員がいま増加しているとありました。ここ数年、学校が忙しくなって、教員の多忙化は凄まじいものだと言われておられますが、お手紙に具体的なことがあげられていて私は教員の実態を初めて知りました。多くの報告書など事務的な仕事が沢山あること、会議もあり、子どもたちと接する時間が少ないことは私の教員のイメージを変えました。先生がたが、残業、家に持ち帰りの仕事をしてもなかなか終わらない状況から「学校は大丈夫か？」と私は思ってしまった。近年、先生のうつ病が増

えているという報道は本当だったのですね。教員に余裕がなければ、子どもの教育はうまくいかないことは、当然です。先生ご自身もお体の方は大丈夫なのでしょうが。

その上、先生は教員評価が導入されて、学校に競争原理が持ちこまれていくことに危惧を感じていらつしやいました。そうですね。学校は普通の会社とは違いますから、競争だけではうまくいかないでしょう。先生は、「教員は集団プレーで行うものなので、個人を評価するのは馴染まない」とお手紙に書かれています。

評価だけで教員を追い込んでいけば、病気になる教員が増加してしまうでしょう。もつとのびのびと教員が教育に専念できることが大切だと私も思いました。

第三は、保護者との対応に教員が翻弄されていることが先生のお手紙でわかりました。ほんのわずかな親が学校にいろいろなことで苦情を言ってくることもわかりました。学校のシステムのことは言わずに、自分の子を有利に扱ってほしいという一方的な要求をしてくるらしいですね。お手紙では、まだ名前を名のりつけてくる親はいい方で、名前を言わず、学校に文句を言ってくる親もいるそうです。学級担任や学校に苦情を

言わないで、すぐに教育委員会に不平を言う親もいると先生は書かれています。私も学校に行くのは、敷居が高くなかなか行きにくいですが、学校の先生がたと話し合わないで、頭ごしに教育委員会に苦情をぶつけても何も解決しないでしょう。子どもがかわいそうです。子どもを健やかに育てるために、保護者と先生が仲良くすることが大切だと私は思いました。

第四は、子どもたちの「いじめ」「不登校」が更に増えていくのではないかと先生は不安に思っておられることです。教育委員会は数だけで、「いじめ」がなくなつたとか、「不登校」が減つたとしますが、「いじめ」「不登校」が年々、学校では大きな問題になつているとお手紙に書かれていました。そして、一つ一つのケースがそれぞれ違つているので、教員の対応が難しくなつてきたことが先生のお手紙でわかりました。子ども自体が、私たちの時代とはまるで変わつていていることが教員を苦しめているようです。先生はやはり教員を増やすことが、「いじめ」「不登校」を克服していくために重要だと書かれていました。私も子どもの問題をまず優先的に解決することが大切だと思いました。

先生はお手紙で、今の学校がかかえている問題を率

直にお話になつていらつしやいます。それだけ、学校が大変な状況だと思われれます。私はこのお手紙を拝見して、これは校長先生たちの悲鳴だと感じました。この悲鳴をあげる勇氣に拍手を送りたいですし、それを受けとめて、少しでも学校をよくすることが大切だと私は思いました。

教育再生会議や文科省、教育委員会が行なっていることは正確には知りませんが、先生のお手紙からしてもとても解決する道には思えないのです。やはり、先生がお手紙に書かれていることをみんながしっかりと考えてほしいですよ。

行政が学校の現実を踏まえて、どうして「教育改革」をしないのか、私は不思議でなりません。先生を始め、学校の教員の皆さんが何よりも「教員を増やしてほしい」と強く求められているのなら、すぐに教員を増加するのがよいと簡単に思つてしまいます。もちろん、それにはお金がかかりますが、子どものためになることなら、お金のことはばかり言つてはいられないことだと私は思います。

私の父はよく「今の学校の先生はたるんでいる」と言います。「学校の先生がしっかりしないから、ダメな

んだ」と語気を強めています。しかし、この先生の手紙を読んだら、少しは考えが変わるかも知れません。いかに今の学校の実態を知らないで、学校について語っているかわかりました。

お許しただければ、先生のお手紙を、うちの父だけでなく、多くの人々に読んでほしいと思いました。このお手紙は先生が学校を知ってもらいたい、よい教育をしたいという叫びと受け取りました。私はこの手紙の内容をできるだけ多くの人に話していきたいと強く思いました。

A校長先生の勇気に拍手をおくります。今後の学校教育で先生が子どもたちの胸に希望の灯をともしつづけることを期待して、ペンをおきます。

校長アンケートを考える

いいたがた県民教育研究所が全県の教育長と小中学校の校長にアンケートを実施した。校長がアンケートの回答を寄せることは正直、皆無ではないかと多くの人が予想した。しかし、思いがけず校長アンケートの回答が約20%強返ってきた。東京大学のアンケートとの回収率よりは低いが、新潟県の小中学校の校長アン

ケートが返ってくること自体、驚きであった。

なぜなら、県内の校長はどなたもいわゆる「研修団体」(研修団体を名乗るが、実体は人事を握る強い利権集団)に所属していて、個人で考えを公表することはなかなかできない体質になっているからである。

ところが、校長がアンケートを返送してきた。それも全国学力テスト、高校普通科全県1学区制、学校選択制の項目だけの回答でなく、記述欄にビッシリと書かれたものが多かったのも二重の驚きであった。校長が学校運営をしていく中で、いかに現在の教育政策が矛盾していて、「学閥」の校長も発言しなくてはならない状況に追い込まれているのがよくわかった。

よく発言してくださったとアンケートを返された校長さん方の勇気に拍手を送りたい。

回答されたアンケートの記述欄を読んで、私なりに特徴を4点に整理したのが、最初の「A校長先生の手紙」の内容である。

「研修団体」の校長が勇気を持って発言した最大の理由は、教育再生会議や文部科学省が校長の意見も聞かず、トップダウンで教育政策を矢継ぎ早におろしてくることであろう。

どの校長も学校運営するにあたって、悩み、苦しんでいる。今日、いじめ問題、不登校問題を解決することや学力向上対策、教員評価など校長が直面している課題は山積みされている。回収されたアンケートの記述欄を読むと、どの校長も「口を出す前に人を学校に増やしてほしい」と強く願っていることが実感で伝わってきた。今ほど校長職は大変な時はないかも知れない。この回収されたアンケートは、まさに県内の中学校の校長の「悲鳴」といつても過言ではない。

その上で、勇気を持ってアンケートに答えられた校長に対して、にいがた県民教育研究所はどのようなことができるのか真剣に模索していくことが望まれている。

校長と共同で教育に正面からあたる

日本の民主的な教育は、権力との対抗関係で見てきた歴史がある。それは学習指導要領であり、文科省、教育委員会としては校長だった。そのために、現場の統治者である校長とは対立する構図が民主的を標榜した教師に少なからずあったといえる。

しかし、現在の日本の教育は多国籍企業の要請に

える教育である。教育に競争原理を強いる新自由主義政策である。学校選択制や学力テストによる学校間の競争はその最たる例である。

この現実には、学校の責任者である校長が悲鳴をあげている。校長も学校の子どもたちを健やかに育てることを第一義にしている。競争原理だけの教育には疑問を感じてしまうのである。このままでいけば、校長になることすら嫌う傾向がすすむかも知れない。

今、教育を真剣に考えていこうとした場合、民主的な教育を望む人も保守的でもまともな教育を望む人も校長と共同で実践していくことが求められている。

そうしなければ、県内でも学校のシステムが機能できなくなっている状況が広がっている。

回答してくださった校長の良心を受けて、にいがた県民教育研究所が丁寧に問題解決のために、研究していくことが要望されている。私自身も回答された校長のアンケートを読みながら、自分は何ができるのか自問自答している。自分の所属する中学校で、校長を含むすべての教員や職員と子どもたちと共同で教育を営むことこそ、校長アンケートに込めるものだと思じている。

(こばやし あきら・新潟市小須戸中学校)